

# I 研究の目的

## 1 研究の背景

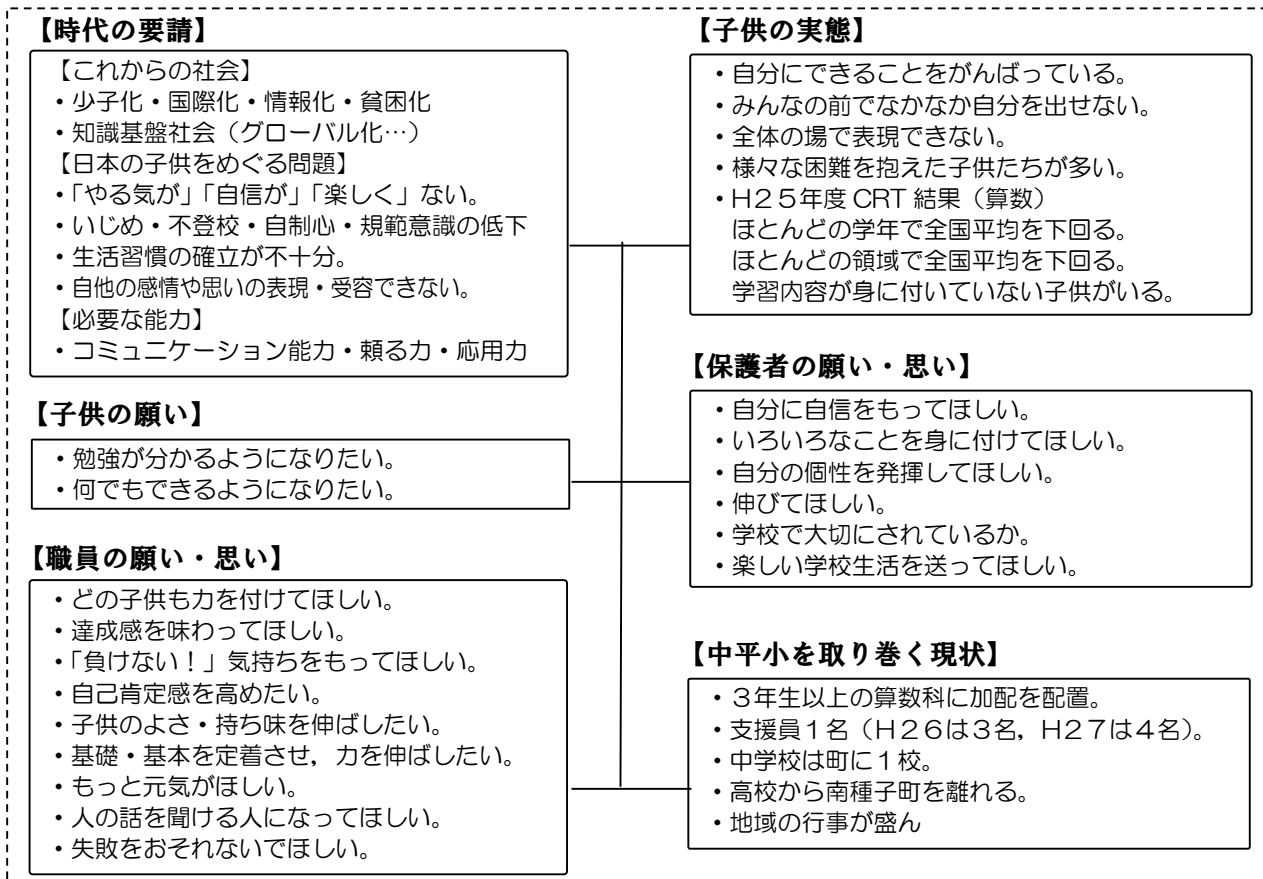
本校では、前研究において、豊かなコミュニケーションを図ろうとする子供の姿を目指して、外国語活動を中心に研究してきた（平成23・24年度県指定小学校外国語活動実践研究協力校）。

平成25年度は、過去2年間の研究を踏襲し、外国語活動を核としながら、他教科等や日常生活においても、豊かなコミュニケーションを図ろうとする子供の育成を目指した。そこで、新たに「特別支援教育」の考え方を取り入れて、更に一人一人の子供を大切にしながら、課題の解決を図ろうとした。その結果、外国語活動が子供たちにとってより活動的で楽しい時間となってきた。また、他教科・領域等においても、コミュニケーション能力を発揮しながら、各教科・領域等で育まれるべき資質能力が相まって高まる様相を見取ることができた。さらに、担任、教科、単元等によって取組方はまちまちであるが、組織体として全職員で取り組んでいこうとする素地ができてきた。

このように、「特別支援教育」の考え方を取り入れたことで、教育活動が充実し、大きな成果を実感した私たちは、更に具体的な指導法改善とその評価を積み上げ、子供一人一人を高めていきたいと考えた。

## 2 研究の方向

本校の研究の方向を明らかにするために、6つの視点から話し合った。その結果は、次のとおり（「研究のグランドデザイン」の上部を詳細にしたもの）である。



前述の結果より、本校の教育的課題を次のように捉えた。

- 子供が「できる」「分かる」ようになることを、保護者、職員、そして子供自身が願っているが、学ぶ意欲が持続しなかったり、学習内容が定着しなかったりする子供が見られる。
- 子供たちが今後の将来をたくましく生きていくために、自分のよさや可能性を伸ばし、自己肯定感を高めながら、何事にも自信をもって取り組んでいけるようになる必要がある。

これらの教育的課題を踏まえ、目指す子供像を次のとおり設定した。

- ◎進んで粘り強く学習に取り組む子供（学習意欲の高まり）
- ◎学習内容を確実に身に付ける子供（学習内容の定着）
- ◎自信をもって活動に取り組む子供（自己肯定感の高まり）

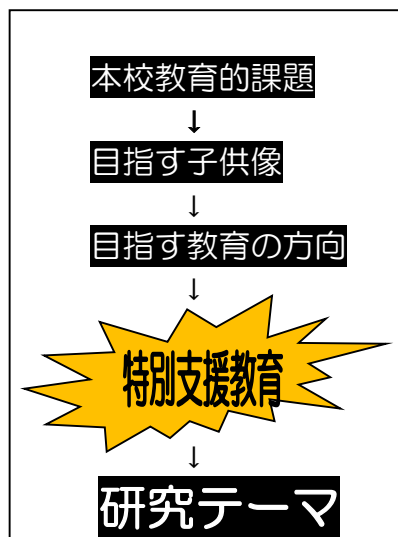
しかし、本校には、様々な困難を抱えた子供がいる。また、教育的ニーズが多様であり、それらが満たされないために力を発揮できない子供もいる。それらに十分に対応できていないために、子供たちが「できない」「分からない」「おもしろくない」といった状況に陥っていないか。そのために、達成感や充実感が得られず、意欲や自己肯定感の停滞につながっていないか。子供たちが、進んで学習に取り組み、学習内容を理解し、自己肯定感を高めていけるように、みんなにとって「分かりやすい」「安心感のある」「活躍ができる」学びの場を、教育の方向として目指していくこととした。

そこで、本研究においても、一人一人が大切にされる「特別支援教育」の考え方を取り入れ、多様な人にできるだけ対応した「ユニバーサルデザイン」の視点で授業づくりを再考していくこととした。

様々な個性をもっている子供たち、また様々なつまずきを感じている子供たち、そんな子供たちに、居心地がよく、分かりやすく、自分の力を発揮できるような授業を提供したり、環境を整えたりする上で、ユニバーサルデザインの視点は欠かせないと考えた。そうすることで、認知処理がアンバランスな子供も、成績不振の子供も、成績上位の子供も伸びていくのではないかと考えた。

なお、研究の充実を図るために、職員の指導体制や教科の特性を考慮して、特に算数科の「数と計算」の領域を中心に、研究を進めていくこととした。

これらを踏まえて、研究主題を次のように設定した。



【研究テーマの設定までの流れ】

## 授業のユニバーサルデザイン化を目指して ～算数科授業における実践～